

修学旅行事前・事後学習の教材について

On Study Materials for a School Excursion

野村幸弘 本郷みね

Yukihiro Nomura, Mine Hongou

はじめに

新型コロナ・ウィルスの感染拡大に伴い、2020（令和2）年2月28日、「政府の休校要請」を受け、大垣市立宇留生小学校はこの日をもって、2019（令和元）年度の授業は修了となった。そのため、これまで経験したことのない状況の中で、今後どのような授業を行えばいいのか検討することが必要となった。2020（令和2）年度の新学期スタート時も状況は変わらず、入学式と始業式も従来通りの形式では実施できなくなり、「三密回避」の対策措置を十分に講じた上で、入学式のみの実施となった。「新型コロナ・ウィルスによる休業」の措置は5月下旬まで継続され、学校が再開したのは、2か月後の6月1日であった。

学校現場は、授業時数の確保、学習指導計画の再構成、学校行事の見直しと精選を行う必要に迫られ、とくに第6学年担当は、小学校生活の中でも大きな行事と言える「修学旅行」の実施に関して、コロナ禍における修学旅行の再検討を行うことになった。8月19日に大垣市教育委員会より「現在の感染状況を踏まえた修学旅行等宿泊を伴う行事の実施について、宿泊を伴う行事は中止、又は宿泊を伴わない実施（日帰り）にすることが望ましい」、「宿泊を伴わない実施（日帰り）とした場合、11月末までに実施することが望ましい」という通知があった。そのため従来の修学旅行はできなくなり、新しい修学旅行の形式、およびそれに関わる指導方法の変更を求められることになった。そこで、「探究的な見方・考え方を働かせ、児童自らが探究するよさを感じ、楽しさを味わいながら探究し続けることができる修学旅行事前調べ学習の展開の在り方と工夫」というテーマを設定し、学習の目的、および児童の学びが従来の内容と同程度になるように指導計画を変更し、指導を行った。8月27日に保護者向けに「現在の感染状況を踏まえた修学旅行の実施について」という文書を配付し、「修学旅行は、宿泊を伴わない実施とし、期日や実施内容については改めて連絡する」ことを伝えた。9月14日に保護者説明会を開催し、修学旅行の実施内容についての同意書の提出を求めた結果、保護者全員から同意が得られ、こうして今年度のみの実施ではあるが、学校と家庭の双方で、修学旅行の方向性の共通理解を得ることができた。

修学旅行の指導計画

最初に、修学旅行の行き先をどこにするのが問題となった。例年の京都・奈良方面で実施ができるかどうかについて再度、検討したが、日帰り実施、感染状況等を考慮した結果、候補地として残念ながら今回は相応しくないと判断した。そこで、私たちが暮らす岐阜県内にも、京都・奈良と同等の学びが体験できる歴史的建造物や文化遺産があることから、行き先を岐阜市にし、「ふるさと岐阜を学ぶ修学旅行」の実施を決定した。これらの経緯説明を含む「保護者説明会」で、カリキュラム・マネジメントの視点から、修学旅行と関連性のある国語では「伝統文化を発信しよう」につなげ、道徳では「公共の精神」「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」「規則の尊重」の体験学習の場として位置付けることを伝えた。

修学旅行の行き先が岐阜市になったことで、従来の京都・奈良への修学旅行の指導計画をほぼすべて作成し直すことになったが、その際、重視したのは、以下の5点である。

- ① 「ふるさと岐阜」を学ぶことを通して、児童がふるさとに愛着をもち、ふるさとのよさを実感できるようにすること、そして児童自らがよさを感じ取る活動の展開に繋げること。
- ② 「ふるさと岐阜」を源にして、日本文化へと視野を広げていく中で、児童が日本文化に親しみをもち、日本の伝統文化を大切にしたいと思う心が養えるよう、調べ学習における学習活動内容の改善と工夫をすること。
- ③ 児童自らが、「学びたい」「もっと知りたい」「なぜだろう」「どのように」など、知識を広げたり深めたり、

新しく生まれた疑問をさらに追究したりして行くというような、探究的な学びの連続性が見られる学習過程にすること。

- ④ 学習のねらいと学習活動に一貫性のある指導計画であること。
- ⑤ 指導計画に他教科との関連性を明示し、教科横断的に学習活動を展開すること。

また「学習のねらい」として、「専門家による授業を受け、新たな情報を得て、知識を広げること」、「現地に足を運び、他者とのコミュニケーションを通して、情報を収集すること」、「収集した情報を取捨選択し、知識と体験を結びつけながら考えをまとめること」の3つを新たに付け加えた。

「学習活動」については、修学旅行の調べ学習として、次のような学習内容とした。

- ① 岐阜県全般について理解を深める。
- ② 「岐阜大仏」「岐阜市歴史博物館」「岐阜城」の歴史、伝統文化について調べる。
- ③ 岐阜県外の文化遺産について知る（他県にも歴史的文化財が存在することを知り、様々な特産物や地域の魅力が多く残り、文化遺産として伝わっている理由を考える）。
- ④ 彫刻芸術作品について、作品の見方を学ぶ（専門の講師を招聘）。
- ⑤ 目的意識を明確にし、現地で質問する内容の整理とまとめを行う。
- ⑥ 課題（個人）の設定と調べ学習を行う。
- ⑦ 体験学習（修学旅行）では、五感を駆使して、収集した情報と現地情報を比較し、情報の分類と更新を行う。
- ⑧ 修学旅行での情報を整理し、まとめる。
- ⑨ 奈良時代の彫刻に関する映像作品（DVD）を視聴する。
- ⑩ 課題を更新し、他教科（国語・道徳）につなぐ。
- ⑪ 新しい課題の調べ学習を行う。

上記の新しい「学習のねらい」と「学習活動」を踏まえて、以下のように、全15時間の指導計画を作成した。

	学習のねらい	おもな学習活動	他教科との関連	留意点
1	<ul style="list-style-type: none"> ・学習のねらいを知り、これからの学習の見通しをもつ。 ・岐阜県内にある名所や歴史、伝統文化について理解を深め、興味をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・11月に国語で「日本文化を発信しよう」という学習内容があることを伝え、社会科や修学旅行を情報源として学習を成立させていく見通しを持つ。その後も、課題追究学習を継続し、プレゼンテーションを作成して発表するという以後の学習の流れを知る。 ・「ふるさと散歩」から分かることをまとめる。「修学旅行の見学地」「その他の地域」 	<ul style="list-style-type: none"> ・国語「日本文化を発信しよう」 ・「ふるさと大垣」科（大垣市小・中学校の独自の教科） 	<ul style="list-style-type: none"> ・修学旅行の目的の説明 ・学習プリントの作成と活用 ・「ふるさと散歩」副読本
2	修学旅行の見学地が歴史的に価値のある場であることを理解し、興味関心を高める。	正法寺「岐阜大仏」「日本一」「素材」「年代」など	<ul style="list-style-type: none"> ・社会科「天皇中心の国づくり」「貴族のくらし」「武士の世の中へ」「今に伝わる室町文化」「戦国の世から天下統一へ」「江戸幕府と政治の安定」 	<ul style="list-style-type: none"> ・調べ学習用 児童用資料の精選 ・調べ学習用 児童用資料集の作成 ・学習プリントの作成と活用
3		岐阜城「織田信長」「斎藤道三」「歴代城主」「稲葉山」「岩山」など		
4		岐阜市歴史博物館「明智光秀」「織田信長」「斎藤道三」「羽柴秀吉」「甲冑」「古文書」など		

5	岐阜県外の日本遺産について、他県にも歴史的文化財が存在することを知り、様々な特産物や地域の魅力が多く残り、日本遺産として伝わっている理由を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・社会科教科書 p.100～101で鎌倉が「なぜ日本遺産になったのか」、「鎌倉の魅力は何か」を考える。 ・日本にある19の世界文化遺産について知る。(教科書 p.158) 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会科「日本の文化遺産を調べよう」「日本の世界文化遺産」 ・道徳「これが日本(伝統と文化の尊重)」 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会科資料集
6	専門家を招聘し、仏像についての理解を深め、作品の見方を学ぶ。	講師(野村幸弘)と担任(本郷みね)が共同授業「大仏について知ろう」を行う。		<ul style="list-style-type: none"> ・外部講師と事前打ち合わせ
7	修学旅行見学地の目的意識を明確にもち、現地で質問したい内容を整理して、まとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・見学地「正法寺」で「岐阜大仏」を見る際の視点をもつ。 ・見学地「正法寺」の住職に、質問したい内容を考え、グループでまとめる。 		<ul style="list-style-type: none"> ・学習プリントの作成と活用
8	興味をもったこと、さらに深く調べてみたいことを課題(個人)として設定し、本やインターネットなどで調べ、情報を集める。	<ul style="list-style-type: none"> ・課題を設定する。 ・分かったことや深まったこと、新しく生じた疑問について調べ学習を進め、学習プリントに蓄積していく。(学びの連続性) ・調べた情報を整理してまとめ、グループ交流会の準備をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国語「日本文化を発信しよう」→11月上旬につなぐ 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習プリントの作成と活用 ・グループ交流会の設定
9				
10				
11				
12	見学地における目的を明確にする。	<ul style="list-style-type: none"> ・事前学習として調べてまとめたことを、グループで交流する。 ・見学地で学びたい、確かめたいことについて出し合い、グループで共有する。 		
13	調べ学習で得た情報をもとに現地を見学し、五感をつかって確かめ、比較したり新たに情報収集したりする。	修学旅行のスローガン「岐阜の歴史を探究し、五感をつかって学びを確かめ、日本文化のよさを再発見しよう」	<ul style="list-style-type: none"> ・学級活動「修学旅行を成功させよう」 	<ul style="list-style-type: none"> ・しおりにメモ
14	修学旅行で、確かめたこと、分かったこと、解決したことを整理、分析し、今の課題を、今後も追究していく課題に更新する。	<ul style="list-style-type: none"> ・事前調べの学びに、見学を通して得た情報を加え、修学旅行の見学のまとめをする。 ・「彫刻芸術」のDVDを視聴する。 ・新たな課題を見つけ、さらなる問題解決のために、新しく課題を設定する。(学びの発展性) 	<ul style="list-style-type: none"> ・学級活動「修学旅行を振り返ろう」 ・図画工作「鑑賞」 ・国語「鳥獣戯画」 	<ul style="list-style-type: none"> ・しおりにメモ ・DVD「慶派の彫刻芸術」
15				

外部講師との共同授業

今回の修学旅行のおもな見学先は、「岐阜大仏」、岐阜市歴史博物館、岐阜城であるが、そのなかでも文化財、美術作品として重要な「岐阜大仏」を特別授業で取り上げることにした。前もって、指導計画の第2時間目に、児童が岐阜市の正法寺の大仏について調べ学習を行っている。その調べ学習で、児童は「岐阜大仏」の知名度、制作方法、制作目的、素材などについて調べ、そこからさまざまな疑問点を出していた。たとえば、「岐阜大仏」は日本三大大仏の一つなのに、なぜ有名ではないのか、なぜ、奈良の大仏のように青銅を使用せず、竹・粘土・和紙・漆が材料なのかなど、岐阜大仏に関する問題を見つけ、それに対して自分なりの考えを示している。その調べ学習の成果を知ったうえで、10月20日に、指導計画の第6時間目に予定していた「仏像についての理解を深め、作品の見方を学ぶ」を野村幸弘（岐阜大学教育学部）と本郷みね（宇留生小学校教諭6年2組担任）が共同で授業を行った。

まず1クラス26人を1グループ3～4人に分け、日本を代表する大仏の写真を4点（図1）児童に見せ、それら①～④までナンバリングした写真を比べて気づいたこと、分かったことをワークシートに書いてもらった。そこで出た意見をまとめて、グループの代表が発表し、それを板書した（図2）。調べ学習では、「岐阜大仏」1点だけを調べたのだが、この授業では、ほかの3点の大仏と比較する方法をとったので、児童が新たに気づくことがいくつもあった。

とくに印象的だったのは大仏の色だったようで、多くの児童が①と④は輝いていて、②と③は古びた色をしていると書いている。また①と④は屋内にあり、②と③は屋外にあるという違いに気づいた児童もいた。そして光背の有無や、それぞれの大仏の顔の表情、目の形、頭髪、衣服、両手の位置が異なっていることも指摘していた。10分しか時間を取らなかったが、それでも児童がかなり細かいところまで観察していることが分かった。

次に用意していたパワーポイントを液晶テレビに映しながら、①奈良の大仏、②鎌倉の大仏、③高岡大仏 ④岐阜大仏であることを明かしたが、10人ほどの児童がワークシートにどこの大仏であるのかについて、すでに答えを書いていた。また多くの児童が指摘していたことだが、①と④は大仏殿の中に安置されているが、②と③は露天の状態にあることをあらためて写真で示した（図3）。①の奈良、東大寺大仏殿は、建物正面のなかほどに窓が切っており、その扉を開けると、中の大仏の顔がちょうど見えるように設計されている。同じように、④の「岐阜大仏」を納めている正法寺の正面扉の上には花頭窓が付いており、板戸を開けると中の大仏の顔が見えるようになっているのかもしれない。修学旅行で正法寺を訪れた時に、住職にそのことを訊ねてほしいと要望しておいた。じっさい、後で述べるように、児童はこの質問を忘れてずに住職にして、答えを引き出していた。

特別授業のテーマは「大仏について知ろう」なので、当然、そ



図1 大仏の比較

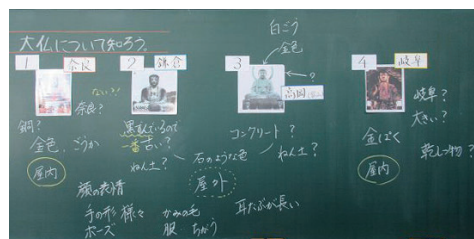


図2 グループの代表が発表した内容の板書

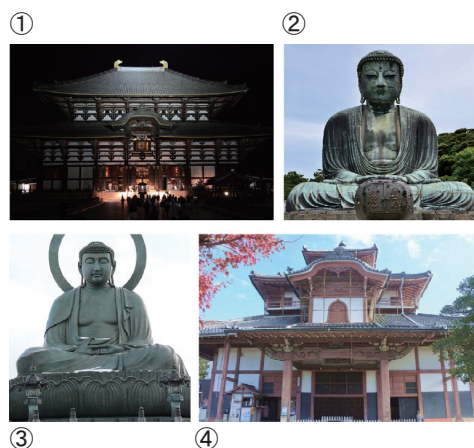


図3 大仏殿の有無

の大きさがどれくらいあるのかを知ることが重要である。そこで大仏の写真に参拝者の姿が写っている写真を見せ、その相対的な大きさを想像させながら、①約16メートル、②約11メートル、③約7メートル、④約14メートルであることを示した。「岐阜大仏」は奈良の大仏に次ぐ大きさで、鎌倉と高岡よりも大きいことが分かった時点で、生徒たちは大きく反応した（つまり、どよめいた）。

美術作品は、絵画でも彫刻でも、そして建築でも、スケールというのは非常に重要な要素である。このスケール感だけは、画集や写真ではけっして分からない。美術作品は実物を見なければならぬのは言うまでもないことであるが、そのおもな理由のひとつは、その大きさを知ることにある。美術を理解するには、たんなる知識ではなく、体験、体感が伴わなければならない。そして大仏の場合、まさしくその大きさにこそ重要な意味が込められているのだから、なおさらである。

そこで話をさらに進めて、じつは大仏は過去のものではなく、現代でも建造されていることを紹介した。たとえば、福井県勝山市にある清大寺の「越前大仏」は、1987年に完成し、奈良の大仏を超える17メートルの像高である（図4）。奈良の大仏より大きな大仏が近年になって作られていることに、児童たちは驚きを禁じ得ないようだった。そして畳み掛けるように、茨城県牛久市にある「牛久大仏」の写真を見せた（図5）。「越前大仏」の2年後の1989年に建立され、立像なので当然ながら座像よりもはるかに大きく、高さ100メートルもある。大仏の内部にはさまざまな部屋が作られていて、エレベーターで高さ85メートルのところにある展望台まで行けることなどを話すと、児童たちは興味津々のようだった。

今度は、日本だけでなく、世界にはもっと大きな大仏があると話を展開する。中国山西省の「蒙山大仏」（図6）は、551～576年に作られ、高さは35メートル。やはり中国の四川省にある「楽山大仏」（図7）は、713年から803年まで約90年もの年月をかけ、断崖絶壁を彫り崩して作られた摩崖仏であり、座像であるにもかかわらず、約71メートルの高さがある。顔だけでも奈良の大仏の像高と同じくらいの高さの途轍もなく巨大な大仏だ。ここでも児童たちは驚きの表情を隠さない。アフガニスタンのパーミヤンの大仏は、6世紀に建立された立像で、高さは約38メートル。ただこの摩崖仏は2001年にイスラム過激派のタリバーンによって爆破されてしまった。

ここで児童たちに問いかける。何のために人は大仏をつくるのか、そしてなぜパーミヤンの大仏は破壊されたのか。最初の問いは、正法寺への訪問時に住職から答えを聞くことになるだろう。2つ目の問いについては、授業の中で詳しく話さなかったが、彼ら彼女らが進学するなかで、何度か頭をよぎる問いになって行くにちがいない。

最後に、日本以外でも、現代に大仏が作られている例をいくつか挙げた。中国河南省にある「魯山大仏」は、2008年に完成し



図4 越前大仏



図5 牛久大仏

(https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%89%9B%E4%B9%85%E5%A4%A7%E4%BB%8F#/media/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Ushiku_Daibutsu.jpg)

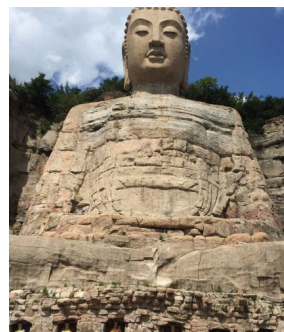


図6 蒙山大仏



図7 楽山大仏

(<https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=2809825>)

た阿弥陀如来立像で、高さは「牛久大仏」を凌ぐ128メートル。おそらくこれが現在、世界最大の仏像だろう。またインドでは、仏像ではなく、政治家ヴァッラブバーイー・パテルの肖像彫刻であるが、これは2013～2018年に作られ、高さは182メートルもある。同じくインドではムンバイで17世紀の英雄ジヴァージーの像が建造中で、2021年に完成の予定、高さは212メートルになるのだという。クラス一同、大きなため息をつく。

ワークシート(図8)に書かれた児童による授業の感想を見ると、複数の生徒が次のようなことを書いていた。

「最初は興味がなかったが、大仏についてもっと知りたいと思った」

「大仏について知らなかったことをたくさん知ることが出来てよかった」

「日本にも世界にもさまざまな大仏があることが分かった」

「今でも大仏が作られていることに驚いた」

「外国の大仏について教えてもらったので、興味を持ったし、もっと調べてみたいと思った」

「バーミヤンの大仏がなぜイスラムに破壊されたのか、あらためて疑問に思った」

「大仏は同じ表情だと思っていたが、ひとつひとつみんな違うことが分かった」

「岐阜大仏は鎌倉の大仏より3メートルも大きいと初めて知った」

「奈良の大仏の台座は奈良時代、胴体は鎌倉時代、顔は江戸時代というところが面白かった」

このように児童の大仏に対する見方は大きく広がり、興味、関心をいっそう高めることができたと考えられる。そして、この事前学習を活かして、10月26日に修学旅行に臨むことになった。

修学旅行の正法寺にて

見学のはじめに、正法寺の小林住職から、岐阜は江戸時代、提灯作りが盛んだっただので、大仏は提灯と同じ材料で作られている、大仏は竹で編んであり、お経の紙を5枚ほど重ねて貼合わせた張りばての構造で、表面には金箔が貼ってあるという説明があった(図9)。続いて児童と小林住職との間に、以下のような質疑応答があった。

児童 A 岐阜大仏は、何のために作られたのですか？

住 職 昔、飢饉があって、多くの方が亡くなった。飢えに苦しむ人たちを助け、不吉なことから守るために、人々の願いで大仏が建てられた。東大寺の大仏も同じで、多くの人たちの協力で完成した。

児童 B なぜ、こんなに大きい大仏をつくったのですか？

住 職 奈良に習って大きな大仏をつくった。1794年にまず顔をつくって、その大きさに合う大仏をつくっていった。それに、大きい方が迫力があるでしょう。ちなみに、正

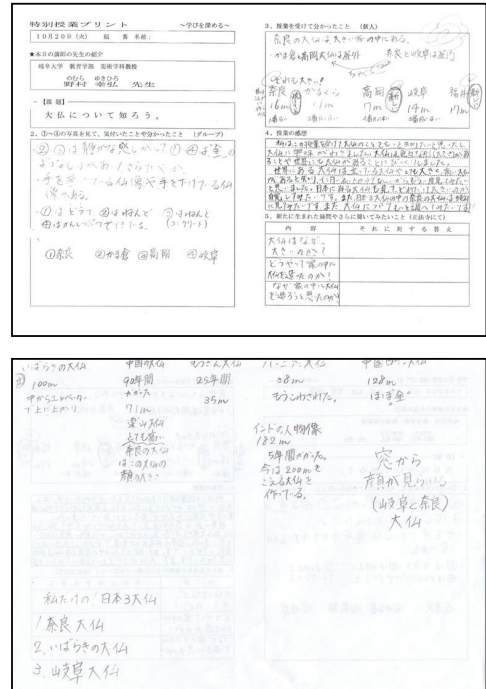


図8 裏表に書かれた生徒のワークシート



図9 「岐阜大仏」を前に説明する小林住職

法寺の大仏は顔が優しい。しかも下を向いている。それは、人々が願ひ事に来た時に、互いの顔を見合わせて話ができるためなんだよ。日頃の行いが善い人には、大仏の顔が優しく微笑んでいるように見えるけど、そうじゃない人には、大仏の顔が怖い顔に見えるんだよ。みんなは、どっちに見えるかな。

児童 C 東大寺は大仏殿の上の方の窓が開けられていて、遠くから大仏の顔が見えるようになっている。正法寺にも大仏殿に窓があるけど、窓を開けると大仏の顔が見えるのですか？

住職 開けたことはない。開けようと思えば開けられるけど、高い所にあるので、届かない。正法寺の大仏は、顔が下向きになっているから、窓を開けても、目線が合わないと思う。

児童 D 岐阜大仏は、どうしてその手のポーズにしたのですか？

住職 ああ、お話しするポーズ、説法をしている。安心なさいという意味。さっきも言ったように、大仏の顔は、願ひ事に来た人々とお話ができるように下を向いている。

児童 E 私は岐阜大仏が日本三大仏のひとつだと思っていますが、住職さんは、日本三大仏がどこの大仏だと思えますか？

住職 公認はない。日本には7つの大きな大仏がある。兵庫にもあったが、戦後に消滅した。秀吉は京都に大仏を建てたが、火事で消失して、今はない。岐阜は三大仏を目指しているが、どこの大仏も人々の思いがあってつくられているから、どことは言えない。



図 10 廊下に掲示された事後学習の新聞

事後学習について

修学旅行を経験した後、それぞれの児童がそこで学んだことをまとめて「個人新聞」を作成し、廊下に掲示した(図 10)。新聞の名称は、「ふるさと岐阜探究新聞」「岐阜の歴史を探究新聞」「岐阜市に大きな大仏が・・・」「五感を使って学ぼう修学旅行」など、児童たちが自分で決め、「記事の内容はかなり詳細な記述となっている(図 11)。「岐阜大仏」を取り上げた児童は 28 人中、26 人で、児童たちの関心の高さが窺える。記事には「実物を目で見て、感動した」、「お堂に入った瞬間、思わず、声が出そうになったほど驚いた」、「想像よりもはるかに大きかった」など、率直な感想が綴られている。

新聞のまとめとして「伝えていきたいふるさと岐阜のよさ」の欄には、「日本三大仏のひとつが岐阜にある」「すごい仏像が岐阜にはある」「乾漆技法で作られた仏像の中で、岐阜大仏が一番大きい」「自慢できる物がこんなに身近にあることを知らなかった」「岐阜は、大仏をつくった人々の心がある温かいまちである」「建造物や大仏をつくった昔の人々はすばらしい」「岐阜の魅力を他

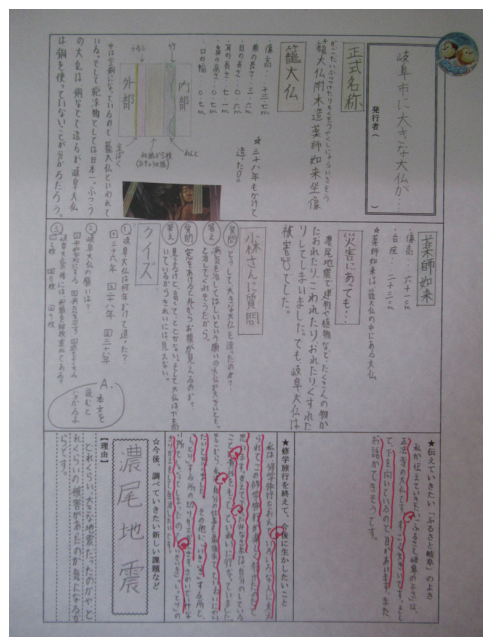


図 11 生徒による「個人新聞」

の人々にも知ってほしい」「大仏を自分たちの手で守り続けていきたい」といった熱意あふれる記述が随所にみられた。

11月12日には「日本の伝統美術について知ろう」を課題にして、野村の制作した映像作品「慶派の彫刻芸術」（図12）を上映した。この作品は2019年4月にイタリアのフィレンツェで開催された学会「日本文化における禅：道元とその時代」において、鎌倉時代の仏教彫刻について発表するために制作された約30分のビデオである。このビデオには、今回、訪問できなかった奈良・京都の仏教寺院、美術作品が数多く取り上げられているため、生徒たちにヴァーチャルな旅行体験をしてもらうことがその上映のおもな目的であった。

このビデオ作品からも、児童たちは多くのことを学び取っている。ワークシートには、ビデオで紹介されていた東大寺南大門の仁王像について「約3000パーツで出来ている」「たった69日間で完成させている」、定慶の「仁王像」について「解剖学の知識がないのに、人体表現が正確である」、運慶の「無著像」について「インド人なのに日本人の顔で表現されている」といった重要な情報がしっかりと書き取られていた（図13）。そしてある児童は「ビデオを見て、修学旅行で学べなかったことが学べてよかった。日本の伝統美術についてたくさん知り、興味を持ったことや気になったことがたくさんありました。慶派の彫刻について知り、リアルで生き生きした様子が伝わり、すごいと思ったし、彫り方でさまざまな気持ちを表現しているのがいいと思いました。こうした彫刻を見ていると、どれほどの時間をかけてつくったのか調べてみたいと思いました」と書いていることから分かるように、ビデオの視聴は事後学習の教材として大きな学習効果を上げたと考えられる。日本の仏教彫刻に関する映像作品は、当初、小学生には少し難易度が高いのではないかと予想していたが、想像以上の理解度を示していたことが明らかとなった。

成果と課題

これまでもちろん行ってきたことだが、今回はとくに新しい指導計画を作成する必要があったため、教師がより明確な目的意識を持たなければならず、その結果、児童もまた目的意識を高めて調べ学習を進めることができたと考えられる。ルーティン化したカリキュラムは、安定的で着実な学習効果を生む一方、内容のマンネリ化、硬直化という負の側面もある。修学旅行の事前・事後学習の教材についても、毎年、少しずつ改善し、数年に一度は、見直すことで、教師の指導も児童の学習も活性化させることが重要である。

今回、「岐阜県」全域から「見学地」調べへと学習の流れを工夫したことで、岐阜県に対する興味がわき、知識が広がった。児童は一貫性をもって調べ学習や現地見学に臨むことができ、それによって主体的に学びを連続させることにつながった。修学旅行先では「何を見たいのか・聞きたいのか」という明確な目的意



図12 DVD「慶派の彫刻芸術」

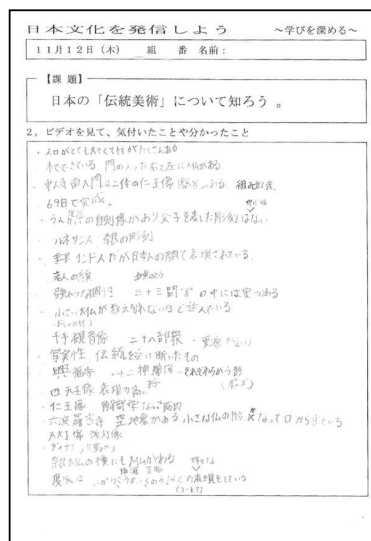
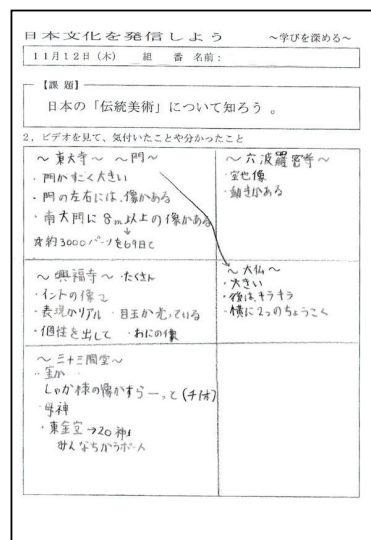


図13 ビデオ視聴後の生徒のワークシート

識を児童に持たせることで、実際に自分の目で確かめたいという主体性が生まれたと考えられる。

見学地の正法寺では、住職の説明を聞き、事前に用意していた質問によって、学びを体感することができた。「岐阜大仏」の実際の大きさを目の当たりにした時には、児童に感嘆と感動の声が上がった。

また、社会科と関連付けながら調べ学習を展開したことで、社会科の既習学習と調べ学習から得た情報を交えて自分の考えをもって課題解決に取り組み、歴史的価値と歴史的背景をつないで事象を捉える物の見方・考え方・考察力を養うことができた。

事前学習における初めての試みは、外部講師を招いて共同授業を展開したことである。前もって専門家の話を聞くことで、大仏に対する児童の理解度が深まり、価値観や歴史的背景を調べたいという発展的な課題づくりにつながった。事前学習として、非常に効果的であったと言えるだろう。ただ外部講師との共同授業は、3クラスのうち、1クラスでしか実施できなかつたため、各クラスで児童に学びの差が生まれてしまったことは、今後の課題である。もっとも、外部講師との共同授業はビデオで録画・編集し、他のクラスで見せる準備はしてたのだが、AV機器の環境が整わなかつたため、それをうまく活用することができなかつた。次回は、各クラスの担任と外部講師が事前に綿密な打ち合わせを行い、そこで知識や情報の共有、確認を行い、どのクラスでも同じ学習内容となるような工夫・改善が必要である。

言うまでもなく、今回のような特別な事情がなくても、従来の修学旅行において、課題探求的な学習は必要である。教師がつねに明確な目的意識をもち、きちんと計画を立てて学習内容を展開していくことは、児童の学びが深まることにつながる。たとえば、来年度、京都・奈良への修学旅行が実施できた場合、東大寺の大仏を見学地に入れるならば、「日本と世界の大仏」という授業を行うのも効果的だろう。また奈良の大仏と同じ「毘盧遮那仏」が安置されている唐招提寺を見学コースに入れ、2つの大仏の表現を比較・考察するといった鑑賞の授業も展開できるだろう。そうすれば、修学旅行をすることによって、図工・社会・国語・道徳の4教科を有機的に関連させた教科横断型の授業が可能になると考えられる。

事後学習については、修学旅行後に、野村が制作した「慶派の彫刻芸術」のDVDを視聴したが、この映像作品には、奈良、東大寺南大門の仁王像、大仏殿の毘盧遮那仏像、重源像、興福寺北円堂の無著・世親像、南円堂の四天王像、東金堂の十二神将像、宝物館にある定慶の仁王像、康弁の天灯鬼・龍灯鬼像、京都、六波羅蜜寺の空也上人像、運慶・湛慶像、和歌山、金剛峯寺の制多迦童子像、三十三間堂の千手観音像、二十八部衆像など、鎌倉時代につくられた数多くの仏教彫刻の傑作が紹介されている。したがって、実際に現地には行けなかつた京都・奈良の主要な寺院が所有する国宝や重要文化財について鑑賞することができた。また、児童の視野が岐阜から他県へと広がり、事前学習で得た知識と現地で体感した学びを基にして、「比較して見る」という学びができるようになった。比較することによって、作品をたんに見るだけでなく、細かく分析的に観察する方法を学んだ意義は大きい。

修学旅行後に、家族で京都・奈良に足を運び、実際に大仏や建造物を見に行つた児童が数名いた。このことから、今回のコロナ禍における修学旅行が「ふるさと岐阜」のよさを再認識することを目的にしていたが、それにとどまらず、児童自らの学びに向かう主体性が見られ、「深い学び」へとつながつたのではないかと考える。授業が児童の好奇心、興味、関心を引き出し、学びの動機をもたせ、自ら主体的にアクションをおこすきっかけを作ることにあるとしたら、映像作品の鑑賞はまさにその役割を十分果たしたと言えるだろう。映像を見れば、今度は実際に本物を見たいという気持ちになることはよくあることで、その意味でも、映像作品の鑑賞も非常に有効だったと考えられる。

カリキュラムマネジメントの観点では、この「ふるさと岐阜」のよさを探究する学びを、国語科の「日本文化を発信します」という学習教材につなぐ計画を立てている。事前から追求してきた内容を更に深める、あるいは、事後に新しく生まれた疑問等を新しい課題として設定し、調べ学習を通して追究していく。「岐阜」から「日本」へと視野を広げることにより、「日本文化」についてさらに広く学び、そのよさや魅力についてまとめたことを発表するという学習展開にする計画である。ここでは、「比べて見る」という学び方を生かした学習ができるようにしたい。3学期には、総合的な学習の1年間のまとめを発表する場がある。「宇留生小学校へのエール」と題し、学習や活動における自身の成長をまとめ、来年度6年生になる5年生に向けて発表する。今回の修学旅行で学び、深めた知識、情報を十分に活用して、「ふるさと岐阜」の魅力を他学年に発信できる児童を育成していきたいと考えている。

